二度目の出会い。

妖桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
二度目の出会い。

【Ｎコード】
Ｎ３２６８Ｚ

【作者名】
妖桜

【あらすじ】
もしもまた会えるのならば、伝えたい。

（前書き）

ノーマルエンディングからの斎千。

もしも生き残っていた斎藤が、町で千鶴を見つけたら・・・です。

斎藤×千鶴

の斎藤目線でいきます。

人物を表現するのは不得意だけど、最後まで読んでね。

あの旗を最後に見たのはいつだったか。

銃声も唾なりも聞こえない今、新選組を覚えている奴はいるだろうか。

俺は、今でも誠を貫けているのだろうか。

「――――5年、か。」

澄み渡る青い空を見上げながら斎藤はぽつりと呟いた。

土方と別れて会津で戦ったのは5年前。

時代が大きく変わったのも5年前。

そして・・・

千鶴がいなくなったのも5年前。

どの意味で呟いたかは自分でも分からないが、
なんとなく、ふと空を見上げたら考えてしまった。

「誠の旗に似てるからか。」

呟いた理由が簡単に分かってしまって思わず苦笑してしまう。

雲一つない空が、昔誇りをもって掲げていたあの旗の色に似ているのだ。

新選組で生き残った者は自分以外はほとんど死んだと聞いている。
だから新選組で生き残った者なら誰でもいい、会いたいと思う。

けれど、一番会いたい人は。

「・・・・千鶴・・・・」

新選組を思い出すと必ず思い出にいる彼女。

そして生まれて初めて好きになった女(ヒト)。

出会いは最悪だったとしても千鶴がいるだけで幸せだった。

春の日だまりのような笑顔を見るだけで、汚れた魂が清められたと思える不思議な彼女。

千鶴にたくさん救われたのに。

己で護ると決めて護れなかった。

女として生きる道を奪ってしまった。

千鶴の幸せを願っていたくせに自由を奪った。

千鶴を想うと幸せな気持ちと悔しい思いが入り交じる。

千鶴が行方不明になったあの日。

共にいた源さんは遺体となって見つかったが、そこに千鶴の姿は見当たらなかった。

千鶴の遺体を見なくて良かったという思いと護れなかったという悔しさ。

探しに行きたいのに行けない。

あの時のみんなの哀しみようは今でも脳裏に浮かぶ。

これらの思いは全て、告げられなかった想いと共に胸にある。

遺体がなかったことをいいことに、自分達が奪った千鶴の幸せを今はただ祈っている。

生きていると信じて。

「・・・昔のことを考えすぎた。」

今さら想っても仕方ない。

今自分にできることは新選組を語り継ぐことと仲間の分まで生きること。

それを一生護ればいい。

そうと分かれば再び現在(いま)をみる。

「これ以上立ち止まって考えれば職務怠慢になるな。」

警備員の仕事に戻り町を見渡す。

どこにも争いはない、そう確認して路地裏に曲がる。

「きゃっ」

曲がった瞬間誰かにぶつかり、反射的にその人の腕を掴む。

「す、すみませんっ」

「！！」

その声に耳を疑う。

それは、今さっきまで頭に浮かんでいた人の声。

多少大人びているが聞き覚えのある澄んだ声。

横に緩く結っている艶のある黒髪。

今こそ着物だが、後ろで髪を高く結ってたあの少女と重なる。

まさか・・・

「・・・・・千鶴。」

「・・・え？」

小さな声で呟いたはずだが、その声に反応して彼女は俯いていた顔を思いっきりあげる。

「あ・・・」

目が合うとあの大きな瞳はこぼれ落ちそうになるほど見開かれ、何か言いたそうに口をぱくぱくさせる。

今、お互い似たような顔をしているだろう。

「さ、斎藤・・・さん？」

「千鶴。」

今度は核心めいた声ではっきりとその名を口にする。

「斎藤さん！生きていてくれたんですね・・・・良かった。」

「・・・会いたかった。」

「斎藤さん・・・」

「千鶴。」

もう一度お互いの名を呼ぶ。

（千鶴はこの5年間でずいぶんと変わった。）

袴から着物に、高く結っていた髪は緩く横に変わったのはもちろん、雰囲気や仕草、声など内面もあの頃の面影を残しながらも大人びていた。

だが、千鶴に見惚れながらも一つの考えが頭を過ぎる。

今の千鶴は女らしく生きている。

なら、一生共に過ごす男がいるのではないか？

その問いの答えが聞きたくてたまらない。

「一人・・・か？」

幸せに暮らしていると千鶴の口から聞きたいのに、誰にも奪われたくないという独占欲が混じり、恐る恐る尋ねる。

千鶴は一瞬哀しそうな顔をして俯く。

「・・・ずっと、たった一人で生きてきました。

ずっとずっと、こうやって誰かに・・・・斎藤さんに会えることを信じて生きてきました・・・」

話している途中で千鶴の瞳に涙が溜まる。

一人で生きてきた。

その言葉を聞いて嬉しいという気持ちが溢れ出す。

幸せに暮らしてほしいと願っていたはずが自分の手で幸せにできると思った瞬間、
千鶴を強く抱きしめた。

「さ、ささ斎藤さん！？」

千鶴の頭に腰に腕を回す。

「伝えたいことがある。」

率直すぎる言葉に驚いて、
じたばたしていた千鶴だったが少しずつ落ち着き、
ゆっくりと斎藤の背中に腕を回す。

「千鶴・・・・俺は、あんたが好きだ。あんたを幸せにしたい。」

左之のようにかっこいい言葉は言えない。
平助のように真っすぐ見つめることはできない。
けれど、伝えたいことはぶっきら棒でもはっきりと伝えたかった。
しばらく斎藤の話を黙って聞いていた千鶴が口を開く。

「・・・・私で、いいんですか？」

「あぁ。」

「私が、斎藤さんの傍に一生いても、いいんですか…？」

「俺は残りの生を千鶴と共に過ごしたい。」

「わ、私も・・・」

千鶴は身体と声は小刻みに震えさせながらも、真っすぐに斎藤を見つめる。

「私も斎藤さんのお傍にいたいです。」

その答えに安堵し、抱きしめていた両手を紅く染まった千鶴の頬に添える。

そして。

お互いの気持ちを、温もりを確かめるように千鶴の唇に自分の唇を重ねる。

生暖かくて柔らかい千鶴の唇が全身に伝わる。

確かめ合うとそっと唇を離し、再び抱きしめる。

「二度と約束は違えない。必ず護る。」

「はい！」

次こそ千鶴を護り抜く。

己のすべてを賭けて。

「……ん……っ」

深く、深く。
二度目の口づけは甘く優しく。
どこまでも二人を包み込んだ。

街角でぶつかったのは偶然か、
はたまた運命か。

二度目の出会いがくるくると廻り始める。

（後書き）

どうでしょう？

うまく書けてましたか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3268z/

二度目の出会い。

2011年12月11日10時45分発行